



神戸市東灘区住吉本町 1-4-4
TEL・FAX 078-822-2066
E-メール fkmds@muf.biglobe.ne.jp
URL <http://www2s.biglobe.ne.jp/~fkmds/>
JWORD で検索するなら・・・E'ン'グ'ル'.jp

活動報告 終わりました！ありがとうございました

菊本千永モダンダンスステージ 1月22日(土) 県民小劇場

「ゴーストバスターズ」「GIFT」「cuddle me」「memories」「doppelgänger」「歩く」

作舞 菊本千永 藤田佳代(歩く)

出演 寺井美津子 金沢景子 かじのり子 向井華奈子 鎌倉亜矢子 灰谷留理子 石井麻子 仲間久美子 名田麻希子 萩原陽子 長谷川千夏
梁河西 西田梨緒 平岡愛理 山下真奈 姜未喜 佐藤佑香 西津華世 谷岡亮 田中彩加 谷岡みなみ 菊本千永

菊本千永モダンダンスステージ を無事終えることができました。佳代先生、出演者、スタッフのみなさま！心から感謝しています。また、お忙しい中観に来てくださったみなさま本当にありがとうございました。批評を載せていただきました。また、みんなに読まれるのは...と躊躇される衣川さんに頼みこんで、感想も書いていただきました(私は彼女の文章のファンなのです)。どうぞ一読ください。 菊本千永

しっかりしたコンセプトに基づいた創作活動を着実にやっている藤田佳代。幹部たちにもその機会を与えている。今回は菊本千永三回目のリサイタル。自作とともに藤田佳代の作品でダンサーとしての側面を示した。

まず新作『ゴーストバスターズ』。人間性を奪う現代の病根をゴーストとして、それに犯されながら闘い、自分を取り戻す群像を描く。じょじょに画一化される人間をかぶりものなどで表現、それが極限に達すると断固としてそれを打ち捨てて自分に戻る。全員一線で客席に訴える場面など強いメッセージ性を感じられるが、反撃にいたるプロセスにもう少し具体性があるとさらに説得力を増したろう。二部は改訂再演など四作。もっとも完成度が高いのは、運命という贈り物との葛藤を描いた『Gift』。アイデアが面白いのが、菊本と金沢景子による『doppelgänger』。同一人が舞台袖から出入りしているように見せながらしだいに分離して行き、違う側面を見せ、混乱させる。さらに能の雰囲気をもち、動きの確かさで舞台を包み込む本人のソロ『cuddle me』。四人による『memories』は記憶の断片を哀愁をもって引き出してくる。寺井美津子、かじのり子、向井華奈子らが作品の趣を具体化していた。最後は藤田佳代の『歩く』。人間が立ち上がり、歩き始めるまでのプロセス、努力を、いくつかのグループに分かれたダンサーたちが、スティープ・ライヒのミニマル音楽によって演じる。這ったり、転がったり、逆立ちしたりする中で一人(菊本)が立ち上がる。そして客席まで設けられた道をしっかりと踏み締めながら歩く。残りのものも必死にそれに続く。音楽も宗教的なものになる。客席も幼児の初歩歩きを見守るように固唾を呑む。感動的なラストシーン、菊本は凜とした雰囲気客席通路を歩ききった。全体的に大声ではないが、訴えるものが多い公演だった。

うらわまこと(週刊 オン ステージ新聞 2009年1月23日)

1980年代に「ゴーストバスターズ」という幽霊退治のコメディ映画があったが、この名を冠したダンスを見せられると、なるほど現代の殺伐・荒唐の元凶も探し出して退治せねばなるまい。そんな眼に見えないものへの感性が鋭いのがこの人の持ち味だ。それはもう一人の自分にも厳しく及んでおり、4つの旧作品にもよく表れている。最後の「歩く」は藤田佳代の新作。人類が二本足で立つ瞬間を、群舞でじわじわと描く。あの瞬間が進化の岐路だった。その思いは幼児が立つ瞬間とも照応し、こんな濁世でも未来を信じたいくなる。 白石裕史(関西音楽新聞 2009年1月1日)

千永先生は、なぜ作品で道具を用いるのか。以前からずっと気になっていました。

創作舞踊の作品の多くは、手法のひとつとして形あるものをより抽象化するように現わすのが一般的だと思うのですが、千永先生はどちらかといえば、演劇的といえる手法でもって作中で道具を用いて「具体的に」現わそうとされている。そのように私は思うのです。今回、改めてそのことについて考えていると(これは私自身が多少ながら演劇を経験しているためだと思うのですが)あることに気づいたのです。

千永先生は作品で人の弱さや愚かさや醜さ、そしてそれに抗う姿に光を当てられていると思うのですが、これらは例えば表情や仕草に微かに現れることはあっても、実生活においてはほとんど目には見えないものばかりです。これらの目に見えないものたちを舞台上に、より鮮明に出現させるために演劇ならばセリフという方法があります。出演者は独白などで胸のうちを吐露することで、自らの愚かさや弱さを嘆きあるいはそれに抗っている姿を観客に見せることができるのです。しかし、舞踊の場合セリフはありません。もちろん踊ることで表現されているのですが、より鮮明に観客の前に立ちのぼらせるための何かがあるとすれば...もしかしら、これらの道具たちがその役割をはたしているのではないかと思ったのです。

舞台美術(セット)としての巨大な箱や小道具である宝宝箱。衣装の、毒々しいほどカラフルな色使い。それらは見えないものを具体化、物質化するためのセリフのような役割をはたしているのではないのかと。本来かたちを持たない、ひとの内面をより鮮明に舞台上に現わす重要な、言わば「共演者」なのではないだろうか考えたのです。

では、何故それほどまでに具体化、物質化させる必要があるのでしょうか。それは、今の社会が「感情の剥ぎ取られた顔」でしか生活できないほど闇を抱えているからなのかもしれません。建て前を押し通すことで、ことなかれを決め込み無難に過ごす毎日。もちろん全てのひとがそうではありませんが、今は、鈍くなってしまった感情を大きく揺さぶるきっかけが必要な世の中であるとも言えなくはないのです。

目に見えないものを、道具を用いることによってより鮮明に立ちのぼらせ、作品の中に込められたメッセージを投げ掛けている。だからこそ、道具のはたす役割は重要であったのだと思うのです。次はどんな「共演者」が出演するのか、とても楽しみにしております。 衣川佳子

パフォーマー フェスティバル 2月8日(日) 県民小劇場

ゴールドベルグ変奏曲による花たちの季節

構成 藤田佳代

振付・出演 寺井美津子 金沢景子 菊本千永 かじのり子 向井華奈子 灰谷留理子 萩原陽子 西田梨緒 平岡愛理

今後の予定 観に来てください

創作実験劇場 3月21日(土) 県民小劇場

作品「ぼくたちのアジュール」「響く森」「川-海を見た」「幻影」「運ぶ」「ハスミ in winter」「carry me」「カメレオン」「凍蝶」「花筏」

出演 石井麻子 板垣祐三子 萩原陽子 佐藤茉莉 梁河西 西田梨緒 平岡愛理 田中彩加 姜未喜 田中文菜 谷岡みなみ

谷岡亮 灰谷留理子 向井華奈子 かじのり子 菊本千永 金沢景子 寺井美津子 安田蓮美 藤田佳代 平瀬信勝(特別出演)

『ぼくたちのアジュール』アジュールってドイツ語で避難所という意味だそうです。焼き場に立つ少年と呼ばれる写真を見たとき、あまりの悲しみに、もうそれを直視する事ができなくなりました。きっとこの子には身も心も寄せるアジュールなんてなかったのでしょう。すべての子供たちにアジュールがありま

すように、と祈りながらこの作品を創りました。

県小の一番の思い出は踊りにまつわることはありません。

子供の頃習っていたピアノの発表会が県小で行なわれたことがありました。たぶん私は3歳だったと思います。プログラム終了後、出演者と先生方との記念撮影があり、緞帳の降りたステージにひな壇が組まれ、生徒たちは幼い子供たちを前列にして着席してありました。私は隣の席の子と、本日ご褒美にももらったピンクのカーネーションのブーケを見せ合いながら楽しくおしゃべりをしていました。もちろん最前列で。ふと、緞帳裏側の棧に手をかけた瞬間、撮影開始のため、緞帳がものすごいスピードで上がっていきではありませんか！私はその棧を両手でしっかり掴み、そのまま天井に向かってピューッと上がって行きました。

「助けてー、助けてー、落ちるー、落ちるー！！」この手を離したら確実に死ぬ！と必死にぶら下がりました。

「のり子～、のり子～、手を離さない！！」誰が私の足をやはり必死で引っ張ります。命がけで掴まっている私の手は、その力に負けて離れてしまいました。あっ、落ちた、と思った直後ステージに足が着いていました。んっ・・・？？？天井まで上がったと思い込んでいた緞帳は私の足が20センチほど上がったところで止まっていたようです・・・私のイメージでは客席から宙にぶら下がる女の子の恐怖の叫びが丸見えのつもりでしたが、実際は誰もわからない足元がすこし開いた緞帳の下から見えていた程度のことだったのです。私の足を掴んで引っ張り降ろしたのは「あっ、あのエナメルの靴はのり子の足や！こんなにするのはあの子しかあらへん！」といち早く気づいてくれた祖母でした。県小さん、ありがとうね。あのときおかげ様でケガもなく、今でも踊らせてもらっています。そしてさようなら。でも本当に怖かったよ。かじのり子「ぼくたちのアジール」

今回出品する“響く森”は、僕が人前に見せる初の作品だ。そもそもこの踊りは、本番で行われるダンスブーケ用に作ったものだった。

物心ついたときには、山の中で暮らしていたと言って良いほど、森や竹林だらけの辺境の地に住む僕は、日々自然を肌感じて育った。そのため、大地からエネルギーを吸い上げ、空高くそびえる木に昔から憧れ、木に登っては自分を木の幹と一体化させていた。そして去年の夏、作品のテーマを考えつつ、ふと目をやった窓の外の森が風で揺らく姿を見て、何かものすごく大きな力を感じたのがきっかけだった。その後、今回の舞台に出品することが決定。最初はグダグダだった踊りに、改良に改良を重ねて何とか形になった。ここまで仕上がったのは、佳代先生をはじめとする先生方のお陰だ。

少し裏話としては、全体的に、僕の得意とする跳躍技が多い為、脚の筋肉を非常によく使い、踊り終えた後は太ももが軽く悲鳴を上げている。この踊りの練習を重ねた結果、学校での持久走の自己記録を毎回更新し、校内上位にランクインした。一心に一兎を追えば、二兎をも得ることが出来るのだと実感した。また、とある振りがあまりに過激だったのか(当の本人は痛くもなんとも無いのだが)、練習中にタイツが溶けて破けてしまうハプニングもあった。本番も間近に迫り、今も更に良い作品になるように、多くの先生からアドバイスを受けている。相変わらず言うことを聞かない膝と足首を相手に悪戦苦闘し続けているが、作品が強くなる人の記憶に残るよう、日々精進し、極めて行きたい。谷岡亮「響く森」

兵庫県民小劇場。はじめてその舞台を踏んだのはいつのことだったでしょうか。

土曜劇場という名の催しで、何度か出演させていただき、その後、創作実験劇場、研究所教師たちのリサイタルで大変お世話になりました。

冬は冷房、夏は暖房の空調、隠れる場所のない舞台袖、やたらに低い椅子で鏡のとても見づらい狭い楽屋…悪口をいっぱい言いながら、それでも、ここで、作品を創らせていただきました。それも、今回の創作実験劇場まで。今までほんとうにありがとうございました。

最後の今回は、「川・海を見た」を出品します。まだ、試行錯誤を繰り返していますが、強力な出演者に支えられ、堂々と海に流れ込んでいく川を表現したいと思っています。寺井美津子「川・海を見た」

「幻影」は中原中也の『幻影』という作品を「凍蝶」は高浜虚子の「凍蝶の己が魂追うて飛ぶ」という句をモチーフに作っています。いずれも自分の中の自分というのをテーマとして踊っています。

「幻影」は私の中にはもう一人のわたし=影がいるような気がして(多重人格とかではないですよ)そのわたしのほうが私よりも「ワタシ」のことをわかっているのではなからうか...と思い、自分って案外自分のことわかってるようでわかってないな...と。

「凍蝶」は句のままなんですけど生きてるって自分の魂を追いかけるとか...と。なにがあってもとにかく純粹に自分の魂を追って追って追いかけ続けて肉体はいつか滅んでもそうすることが生きてるということかと思っ、自ら追うのをあきらめたくない。

今回の創作実験劇場を最後に兵庫県民小劇場で踊ることができなくなってしまいます。いろんな思いのつまった劇場がなくなるのはなんともいえないさみしさですが、向井華奈子「幻影」「凍蝶」

命あるものは生きていてよい。人を殺してはいけません。では人を殺したひとが生きていてよいか。むずかしい問いを自分に問いかけて答えられないままアメリカのアフガンやイラクからの帰還兵のテレビニュースや新聞記事を見るにつけ帰還兵たちが人間として深い苦悩を背負っているのを知りもう一度戦争は絶対ダメと心に刻みました。

わたしの命を運ぶのに踊りの道を50年ほど歩いてきました。この間幸いにも日本に戦争はありませんでした。ある意味踊りに専念できました。しかし決してまっすぐ道でもアスファルト道でもありませんでしたが振り向けば同じ道を若い人たちが歩いている！！ではありませんかあたりまえでしょといわれればそうなんですけど正直言ってうれしくて泣きました。そして踊りの道を歩いているあるいは歩き始めたひとたちがこの道を歩き通せるように何が何でも平和を保ってほしいと強く思っています。「運ぶ」はこんな気持ちの中で創りました。

「ハスミ in winter」はハスミちゃんとサクラの木との四季のシリーズの最後です。丹生ナオミさんに作曲を依頼し、当日は生演奏でお届けします。丹生さんは現代音楽の作曲家。曲が届いたとき、「こんな難しい曲！！」と周りには心配しましたが、ハスミちゃんは、とてもきれいに踊ってくれています。藤田佳代「運ぶ」「ハスミ in winter」

小学生の時、社会の時間に水俣病のビデオを見て、あまりの恐怖にその日はご飯が食べられませんでした。それ以降、私にとって水俣は直視することができない、恐ろしいものでした。その恐怖が直視できる位のものに変わったのは、何年も経ってからでした。水俣展・・・うたせ船に水俣の死者の魂と生者の魂を同時に乗せて、水俣から東京へ。見に行かなかったのですが、死者と生者の魂が同じ舟に乗る、そのことに感動したのです。その後、恐る恐るでしたが、「苦海浄土」を読みました。あまりにも悲しいけれど登場する人たちは美しい人たちでした。「carry me」は特に水俣を踊りにしたわけではありません。ただ、人間には決して忘れてはならないものがある、ということ。それは死者から渡されたバトンであり、生きている以上、私はバトンを運ばなければならない、という決心を少しづついいから自分のものにしたくて創った踊りです。菊本千永「carry me」

昨年の創作実験劇場から男性との2人踊りを作っていますが・・・いや～大変・・・でも、取り掛かりの遅い私に怒りながらも頑張り下さっています。昨年はテーマは早く決まっていたが曲がなかなか決まらず、今回は曲はすぐ決まりましたが構成・振付が決まらず進まず(汗)。ある本で、他者がいるから自分があるのであって、また自分の中に他者性というものを入るは必ず持っているというようなことを読んで、なるほど・・・と思い今回のテーマとなりました。いつもトロい私をご指導下さる先生方、衣装の啓子様、本当にありがとうございます！！

次回こそは早く取り掛かりたいと思います・・・！？？

灰谷留理子「カメレオン」

「花筏」あちらこちらの樹から散った桜が、風に漂い流れに運ばれ、川面にひとつの筏をつくって大海へと向かう情景を踊りにしました。

現在地球上にはあらゆる死に様があります。病気、事故、戦争、飢餓、天災、老衰など。たとえどんな悲惨な死を迎えたとしても、それまでの人生には必ず幸せな時があり、生命が輝く美しい瞬間があります。私はどの様にこの世を去るのでしょうか。できることならその幸福な思い出を冥土のお土産に持っていきたく...と思っています。花筏はまるでそれらを運んでくれているような気がしました。死を迎えるその時まで毎日瞬瞬小さな幸せを実感しようと思います。

県民小劇場の閉館は非常に残念です。土曜劇場でも何度か踊らせていただき、創作実験劇場では自作品の発表の場。私のリサイタルは3回ともここで開かせていただきました。ここはダンサーとしても作舞者としても見守って育ててもらった劇場です。お客さまの反応が直に伝わってきて、そのせいか安心して踊れる劇場でした。切ないけれど...県小今までありがとうございました。金沢景子「花筏」